

読書通信

第16号
発行人: amagata

憂鬱な日は本を読む

近頃、いや以前から、一日を通して頭がすっきりした経験の記憶が見当たらない。奥歯にものが挟まった感覚のように、絶えず頭のどこかにものが引っ掛かった状態で、晴れ晴れしない。一度気になってしまおうとしばらくそのことばかりが気になる。いつしか忘れてしまうのだけれど、また何かの拍子にふと気になって、また頭から離れなくなってしまう。そんなことの繰り返しで、いつもあれをやらなければ、これもやらなければと変な緊張感の中で生活している。生きていることに充実感などなく、毎日のあくせくした心持ちで己の存在を知らしめられる。明るい未来なんか想像できず、ただ毎日を通り過ぎていくだけだ。こんな私が、自分だけじゃないんだなあと共感できる作品を紹介します。



パツナバー

作品解説

▽芥川龍之介「歯車」(遺稿)

強い神経衰弱と不眠症に冒されている主人公「僕」。「僕の視野のうちに妙なものを?」というのは絶えずまわっている半透明の歯車だった。(中略) 歯車は次第に数を殖やし、半ば僕の視野をふさいでしまおう

その後、激しい頭痛と幻覚。精神病院に入れられないように、そのことを妻子に語ることもできない。

「僕はもうこの先を書きつづける力を持っていない。こういう気もちの中に生きているのはなんだかわれない苦痛である。だから僕の眠っているうちにそっと絞め殺してくれるものはないか?」で結ばれる。芥川龍之介の自殺後、発表された作品。



▽梶井基次郎「檸檬」

「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか」で始まる。

以前私を喜ばせた音楽にも、詩の一節にも、いたたまれず、街から街を浮浪する私。丸善も同様、いまは重苦しい場所過ぎなくなってしまった。ある日、一顆の檸檬によつてしつこかった憂鬱は紛らわされる。けれども、それは長くは続かなかつた。私は丸善で画集を積み重ね、その頂に檸檬を据える。

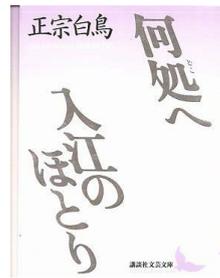
「私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。」「それをそのままにしておいて私は、何喰わぬ顔をして外へ出る。」「丸善の棚へ黄色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善の美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。」作者自身の人生を投影した身辺心境私小説。この作品によつて梶井基次郎は日本文学史に名を残すこととなった。



▽正宗白鳥「何処へ」

「健次は立上るのも物憂そうに、こつ考えている中に、酒が醒めて夜風が冷たくなった。彼れは主義に酔えず、読書に酔えず、酒に酔えず、女に酔えず、己れの才智にも酔えぬ身を独りで哀れに感じた。自分で自分の身が不憫になつて、睫毛に一点の涙を湛えた。」

何処へ生きる方向を求めてよいかわからず、父や師の期待をよそに怠惰で倦怠な日々を送る27歳の雑誌記者菅沼健次が主人公。



【最近読んだお薦めの本】

▼今村翔吾「塞王の楯」

2022年直木賞受賞作品

石垣積みみの匠集団、穴太衆の石垣が城を守りきるか、鉄砲鍛冶の国友衆の作る兵器が城を破るか、近江の大津城を舞台に石垣と火器の攻防を描いた歴史小説。



穴太衆の後継者匠介は絶対に破られない「最強の楯」である石垣を作れば、戦を無くせると考えていた。一方、国友衆の次期頭目・彦九郎は「至高の矛」たる鉄砲を作つて皆に恐怖を植え付けることこそ、戦の抑止力になると信じていた。ともに戦のない世の中を希求するが、その方向は逆であった。

この小説を読んで以来、お城を訪れると、天守閣ではなく、石垣に目がいくようになってきました。特に、自然石をそのまま積み上げる野面積みが興味深い。形の異なる大小の石を実に巧みに積み上げていく。

後記

図書館、古本屋など、本に囲まれた場所は心が落ち着きます。あの凜として温かい空間が心地よい。時間を忘れて、浸りたい。最近はお趣向が凝らされた図書館などをテレビ等で見ますが、コロナの影響もあり、訪れることができないのが残念です。